

侵略者あるいは鬼の末裔として(5)

——日本人は中国・朝鮮で何をしたのか<その4>——

小泉雅英

再開にあたって

表題の連載をしばらく休んだ間に、拙文を読んでくださった方から、丁寧なコメントを戴いた。その中に、戦死した親戚の方を念頭に、「この徴兵制度の下で無益に死んでいった青年たちの生存の「無」であることは「侵略者あるいは鬼」である現実と、どう絡み合うのか」とあった。十分に理解できたかどうか心許ないが、下記のようにお答えした。

「戦場で亡くなった青年も、徴兵制度の犠牲者である、とも言えますが、この戦場が国外であれば、現地の方から見ると、その青年は侵略者としてその場にいた、ということも確かなことです。ご質問の文中の「青年」が、具体的にどこで、どのように亡くなられたのか不明ですが、日本軍の兵士の大半は、戦闘ではなく、病死しているのが現実です。つまり、現地の人々を殺した兵士は多いのですが、彼らによって殺された方は少ない、ということです。とは言え、どのような死因であろうと、戦争に駆り出されなければ、そのような死は、なかった訳で、その意味で、徴兵制が問題でもあるし、そもそも戦争へと国家が進んで行ったこと、それに多くの人々が翼賛して行ったことに、大きな原因があるように思います。それに反対する少数者は、国家権力により弾圧され、小さな声すら上げることができないところまで行ったのが、「つい昨日」の現実だったのではないのでしょうか。

上記のように捉えた上で、「徴兵制度の下で無益に死んで行った青年たち」の死を、どのように考えるのか、それは私にとっても、今後の課題です。もちろん、彼らを「英霊」として、靖國神社に祀り上げる立場であれば、答えは簡単かも知れません。ここでは、国家の戦争責任も、兵士の戦争責任も、問われることなしに、宗教的感情の中に溶解し、追悼されるのですから。「青年」の死は「侵略者あるいは鬼」である現実と、どう絡み合っているのか」というご質問は、靖國神社、国家、天皇制の問題へと繋がっていくので、それらを全て展開することはできません。今はまず、日本人が犯した加害の事実を再確認し、その後、それをどう考えるのか、敗戦後に生まれ、今を生きる私(たち)は、それをどう考えれば良いのか、戦争責任から自由なのか、戦争責任、戦後責任などについて、私なりの考察を示したいと思っていますところ。」

以上の主題で、連載を再開したい。スペースの関係もあり、今回は「三光作戦」について、次回は、その典型である「無人区」化、その後、日本軍の性犯罪について確認する。

「三光作戦」とは何か

「三光」や「三光作戦」という言葉を知ったのは、はるか昔の 1970 年代だった。しかし、それはセンセーショナルな写真と衝撃的な記事から受けた、表面的なものに過ぎない。その歴史的意味と実態を理解したのは、つい最近のことだ(*1)。私だけではなく、多くの日本人には、「南京大虐殺」の事はある程度知られていても、「三光作戦」については、きちんと考える機会は少ないのではない

だろうか。その最大の理由は、敗戦後、極東国際軍事裁判(東京裁判)などでも、国家指導者の一部と「南京事件」は裁かれたが、「三光作戦」を含む中国や朝鮮での加害の責任は、問われることがなかったからだろう(*2)。最高責任者は天皇(裕仁)に違いないが、殺人を含む残虐な行為をした軍隊には、当然ながら「作戦」を立案し、命令を発した者もいるし、現場の実行責任者もいたはずだ。そして何よりも、実際に「作戦」を実行した多くの兵士たち(下手人)がいるのだ。彼らの責任は問われたのか?彼らの罪業は、歴史に記録され、戦後の学校教育の中で、民族的反省として、後世の私たちに伝えられて来たのだろうか?今の時点で、あらためて歴史に向き合い、「三光作戦」など、加害の実態を再確認する必要があると感じるのは、こうした状況認識からである。

*

「三光」とは、よく知られているように、「焼きつくす」(焼光)、「奪いつくす」(槍光)、「殺しつくす」(殺光)という意味の中国語である。そのような徹底的な残虐行為は、これまでも各地で行われてきた。しかし、作戦として実行された「三光作戦」は、「1937-45年の間の日中戦争=中国側のいう抗日戦争のある時期において、中国共産党と八路軍が支配し活動する地域と人民にたいして日本軍が展開した熾滅作戦・掃蕩あるいは掃討作戦(略)・治安肅正作戦での被害を総称して、中国人が「三光」「三光作戦」といった」と定義されている(*3)。それは、計画的に実行された「皆殺し・絶滅」作戦であり、軍事的「ジェノサイド」だった。大事なことは、抗日根拠地(中国側では「解放区」と見なされた地域など、「一定地域の住民の殺戮そのものを当初からの作戦目的としておこなわれた」(*4)という点だ。したがって、「南京事件」などのように、「ある攻略作戦・進攻作戦に随伴して発生した」(*5)残虐行為とは区別されている。「このような一定地域を熾滅し、住民を殺戮することを内容とした作戦」(*6)が、なぜ、どのように計画され、実行されたのか。

「三光作戦」に至る経緯

偶発的な盧溝橋事件(1937/7/7)が、日中間の全面戦争に発展していったのだが、江口圭一によれば、それは三つの事情による。「第一は、「日本の生命線」を確保するためと称された満州事変と「満州国」樹立が日本帝国主義の危機をかえって増大させ、その危機を打開するために、華北五省(河北・山東・山西・チャハル(察哈爾)・綏遠(スイエン)の五省)を分離し「第二満州国」化しようという欲求が(略)日本内部に強固に形成されていたことである。(略)中国共産党軍と外モンゴル・ソ連との連携を分断して、対ソ戦準備を万全にするため、華北の分離・支配がめざされ(略)華北の豊富な資源と市場に対する欲望が切実なものとなった。防共・資源・市場のために華北の制圧をめざした日本帝国主義の膨張政策こそ、日中戦争の全面化をもたらした根源的な要因であった」(*7)。第二は「日本帝国主義の侵略にたいして、中国の民族的危機感がいちじるしくたかまり、抗日救国のための民族的結集がすすんでいたこと(略)日中戦争の全面化は、華北制圧をめざす日本の膨張政策とあくまでそれを阻止しようとする中国の民族的抵抗との激突の帰結であった。(略)第三は、このような中国の抗日への決意と結集にもかかわらず、日本がこの変化をまともに認識しえず、中国を見くぶり、その抗戦力を軽視したことである。(略)華北制圧の欲求をつのらせる一方、中国の「一致抗日」の民族的結集の力量を認識しえず、その抗戦力を軽侮し、一撃論に主導され

て安易に軍事力を行使したことが、日本軍当局の予想外の全面戦争を導いたのである」(*8)。

こうした背景の上で、「1938年10月の武漢・広東作戦によって、日本軍は華北・華中・華南の主な都市と鉄道を占領下においた。しかし(略)軍事的にも政治的にも日中戦争を收拾しうる展望を失い、日中戦争は長期・持久戦に転化した。しかも日本軍が支配しえたのは「点と線」(都市と鉄道)にとどまり、広大な農村・山間部には中国共産党の指導のもとに抗日根拠地(解放区・辺区)が形成され、八路軍(中国共産軍)が遊撃戦(ゲリラ戦)を展開して日本軍を攪乱した」(*9)。しかも、1940年8月から10月にかけての「百団大戦」により、深刻な打撃を蒙ることになった。そのため、「一切の施策を共産軍の剿滅(そうめつ)に集中し、積極果敢なる肅正討伐(略)を実施することとした。このために発動されたのが、晋中作戦・山西西方作戦などの共産軍根拠地に対する「燼滅作戦」である」(*10)。作戦開始の「軍命令にともなう軍参謀長(田中隆吉少将)指示では、「根拠地ヲ燼滅掃蕩シ敵ヲシテ将来生存スル能ハザルニ至ラシム」と示している。すなわち根拠地そのものの、燼滅掃蕩を命じた」(*11)のだ。

「百団大戦は、北支那方面軍の共産党軍にたいする認識を一変させ、(略)主敵が国民政府軍から共産党軍に移っただけでなく、軍隊を相手にすることから民衆を相手にする戦いに変化して」(*12)いった。その上で、「肅正建設三ヵ年計画」を立案し(略)方面軍の担当地域を治安状況に応じて治安地区、准治安地区、未治安地区の三つに区分する。(略)未治安地区にたいしては計画的に討伐作戦を行って、根拠地として再建できないように破壊覆滅する」(*13)という作戦である。その結果、「軍事思想・作戦・実態・犠牲者数において日中戦争の侵略性を象徴する深刻なもの」(*14)と言われる「三光作戦」が実行されたのだった。

以下、その実態を確認しておきたい。

「三光作戦」の実態

◇被害者の証言(1)

本多勝一は、1971年7月7日、盧溝橋事件35周年の当日に、河北省唐山市から東北65kmにある潘家峪を訪れた。燕山山脈と万里の長城の南側、魯家峪、馬蘭峪も近い。当地での取材を基に、『中国の旅』の最終章、「三光政策の村」を書いた。その中で、ある証言者は語っている。「日本軍は美しい山河を蹂躪し、あちこちに砲台を築き、壕を掘り、食料を奪い、人夫を拉致し、婦女を強姦し、家を焼き、勝手気ままに人を殺しました」(*15)。「重傷を負って生きている者を、あるいは後ろから首を切って胸にぶらさげ、あるいは腹と胸とを切断して内臓を散乱させた」(*16)。ある兵隊は、母親が抱いていた幼児を奪い、「その両足をつかんでさかさまにすると、振り子のように大きく振って頭を石にぶつけ、たたき割った。半狂乱の母が、即死したわが子の上に倒れて抱いた。その背中を兵隊の銃剣が貫いた。残った上の妹が母の死体に抱きついた。(略)「お母さん、お母さん」と絶叫する妹を、兵隊は地面にころがした。一方の足を踏みつけると、他方の足をつかんで力いっぱい引き裂いた。最後の悲鳴とともに、腹まで裂かれて、この七歳の女兒は即死した。このように引き裂かれて死んだ幼児は30人くらいに達した」(*17)という。戸数241戸、常住者1300余人の村は、この燼滅作戦で、1230人が虐殺された。「すべての家を焼き払い、すべての家畜を奪

った日本軍は、暗やみが近づくころ村を去って拠点へ引き揚げた>(*18)。1940年1月25日(旧暦大晦日の前日)の惨劇だった。

◇被害者の証言(2)

「一家六人で住んでいた。やはり43年の夏のこと、食事中に日本軍がやってきて逃げ出した一家のうち、まず父親が撃たれて死んだ。母、兄、満三歳の弟と彼は近くの洞穴に飛びこんで隠れた。弟は泣いたので日本軍に発見されることを恐れた母親が乳房で弟の顔を押しさえつけ、窒息死させた。日没時、日本軍が去ったと思った母親が様子を見に外に出たところ、まだ残っていた日本軍に発見され、捕まって強姦されたうえ、腹をえぐられて死んだ。兄と彼自身も穴から引きずり出され、二人とも銃剣で腹を刺されて穴の中にほうり込まれ、上から石で埋められた。兄は死んだが関さんの方は傷が浅く、自力で石を取り除いてはい出したところを探しに来た親戚の者に助けられた。その折、母親と兄の遺骸を直接見た。もう一人の家族である祖父は八路軍の歩哨役をやっていて別の所で日本軍に捕まり、眼球までえぐり取られて殺された。こうして一家六人のうち五人までが殺され、生き残ったのは彼一人だった>(*19)。

◇加害者の証言(1)

「1943年の暮れ、第一大隊の副官をしていたとき、大隊長に対し、私が調査し計画した襲撃計画を意見具申(煽動)して、湖北省当陽県白楊寺部落を襲撃し、全村を火の海にしたばかりか、村民数百名を皆殺しにしました(略)私は部下をつれて部落に乱入し、部落の東端で逃げ遅れていた老人子供を銃剣で突き殺せました。その中には5人の赤ん坊とその親たちもいました。腹の大きい妊婦もいました。この妊婦の場合は、特に裸にして皆の面前で刺殺させて、その苦しむ姿を部下と一緒に見て笑っていたのです。このようにして私たちは、白楊寺部落一帯の平和な中国農民を皆殺しにしたのであります。その多くは婦人と子供でした。ある者は焼き殺され、また石臼で頭を割られて死んでいった老婆もいました。腹の中の赤子もろとも撃ちぬかれて殺された妊婦もいました。そればかりではありません。農民が粒々辛苦して作った穀物や家畜はすべて奪い去り、住民の家は一軒残らず火をつけて焼き払った>(*20)のだった。

この証言者は、高等師範学校(現在の教育大学)卒だが、「天皇を崇拜し、優秀なる大和民族が大東亜共栄圏を建設して東洋の盟主になり、アジアを指導・統治するのは当然のことであり、神から課せられた使命であると思って>(*21)いたという。「神から課せられた使命」として、このような「皆殺し作戦」を具申し、実行したのだろうか。皇民化教育、そして軍隊とは、人間を鬼にも変える装置だった。

◇加害者の証言(2)

「連隊長が12月24日の晩に大隊本部に小隊長以上だけを集めまして、「(略)住民は全部敵に通じておるから女・子どもにかかわらず全部抹殺せよ、物資はできるだけ持ちかえって、引き上げるときには家を焼き払ってこい」という命令を、直接だしたんです。(略)24日の夜半から行動を起こし

て、村を包囲しました。攻撃開始の時期は 25 日朝五時頃だったと思いますが、一斉に攻撃をかけるために信号弾を上げさせたわけです。ところが、そこにはほとんど遊撃隊の陣地らしい陣地はありませんでした。だから実際には、住民に対しての攻撃になったわけです。(略) 実際殺したのは二百数十人でした。しかも女・子どもが殆どでした。逃げのびた人も少しは居たと思います。(略) そして兵隊たちは日頃非常に飢えていますから、この時とばかりに襲いかかっていきました。(略) もうそれは“狼”みたいなものですよ。彼らはそういう機会があれば必ずそこで略奪・強姦をする。この時とばかりにやるわけです。(略) 中国の家は窓があまりありませんから暗いのです。その暗い奥まったところに小さな部屋があったんですが、そこに入ったと同時にすごい異臭がした。目がなれるにつれ、よく見ると確かにその部屋の隅に寝台があってそこに若い女が一人寝ておったんです。一見してこれは病人だということがわかりました。青白い顔をして体を震わせておる。と同時に、その寝台を体でかばうようにして一人の農民が立ち塞がっておったんです。私が当番兵と入っていきなり、(略) 娘は病人だからどうか命だけは助けてくれ、と土下座するんです。当時の私は(略) 良心の一片もない鬼でした。かえってムカムカしてきて、「こいつらも敵に通ずる農民だ、まずその娘から突き殺せ」と、私は当番兵に命じたんです。撃ち殺すなんて鉄砲の弾もったいない、突き殺せ、と。(略) 抵抗する父親を引っ張り出して、庭へ連れて出て、同じように他からつれてきた 5、6 人の農民を荒縄で縛ったのに「こいつも一緒に繋げ」と数珠つなぎに繋いで、彼らの体や頭に奪ってきた豚や鶏の死骸や米袋とかを負わせて連れていったのです。そして最後に、家々に火をつけて、今殺された娘の部屋もろとも、その親の前で焼いてしまいました>(*22)。

◇加害者の証言(3)

「1942 年 7 月山東省東平県において、(略) 師団命令で小麦収買作戦(小麦略奪)に参加した。私の受けた命令は、東平県周辺の小麦を、ある部落に集積せよというものだった。(略) 30 分たっても一粒の小麦も集まらないので、私は分隊員を指揮して(略) 一軒の農家に侵入して見ると、部屋の中で老婆が小さな袋の上に座っていた。突き飛ばして袋の中を見ると小麦が入っていた。老婆は私の足下に来て、「その小麦は病人が食べる分だから、どうか持って行かないでくれ」／何回も頭を床にすりつけて頼んだ。私は部下に命じて、この老婆を部落中央の広場に連行して、殴ったり蹴ったりして拷問をした。またたく間に老婆の顔は裂け、地面まで血が流れた。それでも老婆は「小麦を返せ」と言って、血だらけの顔で私をにらみつけた。私は既に集まっていた部落民に向かって怒鳴った。「お前たちが小麦を持ってこない、この老婆は殺すぞ」／農民たちは一斉に、「もう小麦はない。もうない」と言い、「その老婆を殺さないでくれ」と言って全員地面に座りこんだ。私は最後の手段として、農民たちの見ている前で老婆を殺し、池の中へ放り込んだ。そして更に「お前たちもみんな池の中へ入れ」と怒鳴った。全員はのろのろと立ち上がり池の中に入った。「小麦を持ってくる者は池から出ろ。もし持ってこなければ全員殺すぞ」と軽機関銃を池の中央に向けた。それでも農民たちは子供をかばいながら、「もうない。もうない」と言って池の中に座りこんでしまった。私は「撃て！」と命令し全員を殺害した。小さな池はまたたく間に血の海になった。私は死体をそのままにして部落を出て、次の部落に進んだ>(*23)。

◇海南島における「三光作戦」

日本陸軍は、華北一帯で中国共産党の解放区に対し、一般民衆を敵とした燼滅掃蕩作戦(「三光作戦」)を行ったが、日本海軍は、海南島で同様に「三光作戦」を実施した。1940年頃の海南島の人口は250万人で、鉱物資源が豊富であり、「日本海軍は、戦略の面からも、軍需資源の点でも、かねてから海南島に関心を抱いていた」(*24)のだ。その「海軍が海南島で展開した治安肅正作戦の実情は、(略)日本陸軍が朝鮮や中国で実行してきた民族闘争圧殺のために、民衆自体を敵とする作戦、すなわち人を殺し、物を奪い、家を焼く作戦、中国共産党が名づけた「三光作戦」の再現に他ならなかった」(*25)。「海南島は南方作戦の策源地であり、そのためにも治安確保の必要に迫られていた。また米の収穫季節でもあり、その獲得を図る目的もあった。そのため41年11月25日から、42年1月中旬にかけて、島内全域にわたる治安肅正作戦を行った」(*26)のだ。その実態については、紙幅がなく、省略せざるを得ない。藤原彰の研究(上掲書)や、前回とり挙げた青木茂『華南と華中の万人坑』などを参照されたい。

以上、「三光作戦」の実態を記したが、これは歴大な加害事実の一部に過ぎない。「三光作戦」には、その最も計画的・体系的な残虐行為、すなわち一定地域を封鎖する「遮断壕」や、「無人地帯」の設定(「無人区」化)がある。その実態は、次回、確認したい。

.....

<注>

- *1) 中国帰還者連絡会により、後にまとめられ、再刊された『<完全版>三光』(晩聲社1984年)では、収録された元兵士たち(22名)の手記が、あまりに生々しく連続し、多くの人は途中で頁を閉じるのではないだろうか。たとえ通読できても、ここには残虐行為の集積はあるが、「三光作戦」全体について、その歴史的意味を理解することは難しいのではないか。しかも、収録された体験談は、職業的なライターにより、読み物として整えられ、文章も演出が施されているように感じる。
- *2) 笠原十九司『南京事件と三光作戦』(大月書店1999年) p.80
- *3) 姫田光義『「三光作戦」とは何だったか—中国人の見た日本の戦争—』(岩波ブックレット1995年) pp.18-19 なお同書には、この用語の変遷について、(1941年)「12月7日付の『解放日報』社説において、初めて「いわゆる三光政策」という表現があらわれる」が、「それまでは中国共産党の機関紙等では「焼殺政策」とか「強姦・焼殺政策」といった表現を使っていた」と記されている(p.21)。
- *4) 江口圭一「中国戦線の日本軍」(藤原・今井編『十五年戦争史 2 日中戦争』所収 青木書店1988年) pp.59-60
- *5) 同前書 p.59
- *6) 藤原 彰『天皇の軍隊と日中戦争』(大月書店2006年) p.95
- *7) 江口前掲書 pp.48-49
- *8) 同前書 p.50-54

- *9) 同前書 p.60
- *10) 同前
- *11) 藤原前掲書 p.98
- *12) 同前書 p.101
- *13) 同前書 pp.103-104
- *14) 笠原前掲書 p.79
- *15) 本多勝一『中国の旅』（朝日文庫 1981 年）p.269
- *16) 同前書 p.277
- *17) 同前書 pp.277-278
- *18) 同前書 p.285
- *19) 姫田前掲書 p.14
- *20) 中国帰還者連絡会編『私たちは中国でなにをしたのか』（三一書房 1987 年）pp.108-109
- *21) 同前書 p.108
- *22) 『世界』特集＜7・7＞盧溝橋事件 60 年（岩波書店 1997 年 7 月）pp.98-101
- *23) 中国帰還者連絡会編 前掲書 pp.128-130
- *24) 藤原前掲書 p.133
- *25) 同前書 p.140
- *26) 同前

参考文献

- ・岡部牧夫他編著『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』（岩波新書 2010 年）
- ・桑島節郎『華北戦記（中国にあったほんとうの戦争）』（朝日文庫 1997 年）
- ・『世界』特集・侵略の証言（岩波書店 1998 年 5 月号）
- ・戦争犠牲者を心に刻む会編『中国侵略の空白～三光作戦と細菌戦』（東方出版 1999 年）